

ラジオ放送
＜令和5年10月～12月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.445

もくじ ~ contents

<小川洋子の「私のひきだし」 3 >

☞ 作家・小川洋子さんによる心温まるエッセイ

- 祖父のひざの上で *page 1*
- 梅酒の空き瓶 *page 5*
- 無言を受け止める *page 9*
- かわいいと思う心 *page 13*
- 我（が）を去る *page 17*

<先生 & 信者さんのおはなし>

☞ 金光教の先生や信者さんのお話です。

- 教会は私の一部です *page 21*
- ニコニコ笑顔ができる人 *page 26*
- おくりもの（信心ライブ） *page 31*
- とともに立ち行く（もう一度聞きたいあの話）
兵庫県・社教会 小林健 *page 35*
- せっかく頂いた命やから *page 39*
- 僕の居場所はどこにある *page 44*
- Welcome *page 48*
- 土（どろ）の心 *page 53*
- 今日はおかげ日（信心ライブ） *page 58*

《小川洋子の「私のひきだし」》

「祖父のひぎの上で」

皆さま、おはようございます。作家の小川^{おがわ}

洋子^{ようこ}です。一昨年、昨年と引き続きまして、今年もまた、「私のひきだし その3」と題し、お話しをさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私の父方の祖父は、岡山市にあります、金光教岡東教会の教会長をしておりました。12歳まで教会の離れに住んでいましたので、子ども時代の思い出は、ほとんど全て教会の風景の中にある、と言ってもよいほどです。

祖父は、世間一般の宗教者のイメージとは少し違っていたかもしれませぬ。信者さんとお酒

を飲みながら話をするのが何よりの楽しみで、

冗談を言つては大笑いし、神様に受けたおかげの話になると涙を流す。私が知っているのは最晩年の祖父ですが、とにかく人間臭い人でした。

一度、徳利^{ちくり}のお酒をお猪口^{ちやくこ}に注いだところ、ゴキブリの死骸が出てきたことがあります。信者さん達は皆、ギョツとして言葉を失くしたのですが、祖父は、「今日のお酒が一段とおいしかったのは、ゴキブリの味が染みたおかげじや」と言つて、入れ歯が外れるほど笑い、一向に気にする様子もなく、残りのお酒もありがたそうに全部飲んだのでした。

また、孫をからかうのが大好きで、脇の下をくすぐったり、お化けのまねをして怖がらせたりますのです。

「おじいさん、いいかげんにしてください」
と、祖母にたしなめられるのも、しょっちゅうのことでした。

そういう時でも、祖父は心の底から喜んでいました。私は、愉快なおじいちゃんが大好きでした。今振り返ってみれば、祖父は金光教の教えの中で、生きていること、生かされていること、のありがたさを、全身で表現していたのではないか、と思います。

夕暮れ時、祖父はよくベランダの寝椅子に横たわり、長い時間、空を眺めていました。若い頃、肺ジストマにかかり死にかけてところを、金光教の信心で救われたこと。長男が大学を出て間もなく、結核で死んだこと。祖父は、決してただ単に陽気なだけの人ではなく、私にはう

かがい知れない、様々な困難を経験してしました。特に、長男を亡くした悲しみは深く、家族で食事をしている時など、死んだ長男の名前をふと誰かが口にすると、

「その話はしてくるな」
とつぶやくのでした。これほど沈んだ声が人間に出せるのか、と思わず箸を持つ手が止まるほどでした。

きっと祖父にとっては、信心の意味を問い直す体験だったのでしょう。もしかしたら、結論は出ないまま、もがき苦しむ渦中にあり続けたのかもしれない。

「毎日見とるけど、同じ雲は一つもないなあ」

祖父は言います。

「洋子もこつちへ来て、一緒に見られえ」

私は祖父のひざの上によじ登ります。

「ゆっくり風に流れて行つとる」

夕焼けに染まる雲が空の向こうに細長く伸び、うつつらとした月も上り始めています。

私達は、ただじつと空を眺めていました。あれは一体、何と表現したらいい時間だったのでしょうか。子どもの中には自然の美しさを味わう感受性などなく、ただお尻の下に、祖父の瘦せてゴツゴツした体を感じるばかりです。けれど、それが大事なひと時であり、黙っておじいちゃんに寄り添っていなければならぬ、ということだけは分かったのでした。

金光教の教祖、金光大神こんこうだいじんの教えを集大成した『金光教教典』に次のような言葉があります。

「天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である。人間、また草木など、みな天の恵みを受けて、地上に生きているのである」

一つとして同じ形はなく、常に移り変わってゆく自然の摂理の中に、祖父は偉大な者に受け止められている安心感を得ていたのだと思います。あの静けさ、あの空の広さ、美しさ、ペラндаでの記憶の全てが、祖父の信仰の根本にながっている気がします。

「世界を救ってくださいよ」

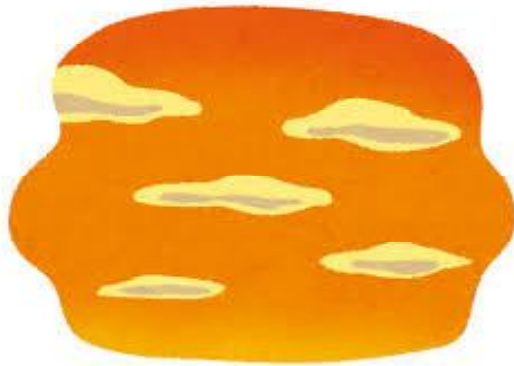
祖父は、よくそう言つて信者さんの両手を握り締めていました。

「自分のことは次にして、人の助かることを先にお願ひせよ。そうすると、自分のことは神が良いようにしてくださる」

これも『金光教教典』の言葉です。遠い空を見つめるような広い心で信心する。個人の苦しみを乗り越えて、他者のために願うような信心をしてほしい。祖父は、そんなふうに言いたかったのでしょうか。

大人になった今、祖父とあのベランダで一緒に空を見つめたい、私はかなわない夢を見たいです。

本日はここまでです。どうもありがとうございます。では、次回、またよろしくお願いたします。



《小川洋子の「私のひきだし」》

「梅酒の空き瓶」

皆さま、おはようございます。作家の小川洋子です。「私のひきだし その3」の第2回。

今日もまた、生活の折々に感じている、金光教と自分の関わりについて、お話ししてみたいと思います。

さて、いつ頃からか、断捨離だんしやりという言葉をよく耳にするようになりました。物があふれる実家の後始末に苦勞した話や、子どもに迷惑をかけるないように、元気なうちに片付けを始めている人の話などを聞くと、物を捨てるのは難しいことなのだなと思います。

それはやはり、どんな物であれ、その人の手

元にあるということ、何かしらの縁によって繋がっているからでしょう。物体として物を捨ててしまったら、それにまつわる記憶まで失うことになりはしないか。そんな不安に取りつかれるのかもしれない。

私の仕事部屋も大変な状態になっております。仕事机を買い替える時、大きなのにすればすつきりするのではと思ったのですが、実際は、乱雑さが机の大きさに合わせて広がってゆくだけの話でした。

子どもが9歳の頃、キャンプのお土産に拾ってきたくれたガラスの欠片。サイン会の時、フアンの女性からもらった手作りのブローチ。出版社の社長の息子さんが、若くして亡くなる前に描いた絵。カメラマンさんからプレゼントさ

れたビーバーの頭の骨……。他人から見れば、どうしてこんなものが、と思われるようなあれこれが並んでいます。

しかし、一つひとつには物語があります。誰かが、私のためを思い、わざわざ自分の時間やお金を使ってくれたからこそ、それに目をやりたり、触れたりするたび、今はここにいない人の心と繋がり合えるのです。もう二度と会えない人もいます。名前さえ知らない人もいます。けれど、ささやかなその小さな物がある限り、私は彼らの気持ちの温かさに慰められ、ありがたい気持ちになります。

人と物の縁を結んでくださるのは、人間の力が及ばない何ものである、と言うしかありません。

「信心する者は、山へ行つて木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれ」

これは『金光教教典』の中にある教えです。単なる切り株であつても、神様が差し向けてくださったからこそ、座つて休むことができた。ならばその切り株に込められた神様の働きに、自然とお礼をしたくなるはずです。

この教えに触れるたび、神様はどこか遠い場所にいるのではない。自分のすぐそば、何気ない切り株にもいらつしやるのだと思わされます。あらゆるところに自然に存在しているのが、金光教においての神様のあり方です。

仕事部屋の戸棚の片隅に、梅酒の空き瓶が一本、置いてあります。決して捨てることができ

ず、14年もずっとそのままにしています。14年前、大学生の息子が通学途中、交通事故に遭い、頭を打って重傷を負いました。私にできるのはただ、一生懸命神様にお願ひすることだけでした。もし自分に信仰がなかったら、あの状況を耐えられたかどうか分かりません。

I C Uに息子を残り、家に戻る途中、車の窓から金光教の教会が見えました。私と主人が中へ入ると、まるで私たちを待っていたかのよう
に、神前しんぜんに先生が座っていらっしやいました。

「神様にお願ひさせていただきます。必ず助けてくださいますよ」

先生はおっしゃいました。私は、心からその言葉を受け止めることができました。通りすがりの道に、突然、教会があった。これは、神様

がちやんと私たちを見てくださっている証拠だと確信しました。

おかげを頂き、手術は成功し、息子は退院することができました。いつ病院から呼び出されてもいいよう、また、退院後も急変した時のために、私はずっとお酒を飲まないでいました。するとある日、息子が梅酒を一本買ってきて、こう言いました。

「もう、お酒を飲んでも大丈夫だから」

戸棚に仕舞っているのは、この梅酒の空き瓶です。この瓶の中には、神様が私に授けてくださった思いが詰まっています。時折、瓶を取り出しては、両手を合わせています。

いつか私が死んだ時、ただの空き瓶だと思つて誰かに捨てられるでしょう。それでも構いま

せん。瓶は粉々になり、リサイクルされるのか、燃やされて煙になるのか分かりませんが、どんな形であれ、この世界を巡り、神様によって新たな形を得て、私に授けられたような掛け替えのない役目を果たすことになるでしょうから。

本日は以上です。それではまた来週、よろしくお願いいたします。



《小川洋子の「私のひきだし」

「無言を受け止める」

皆さま、おはようございます。作家の小川洋子です。「私のひきだし その3」の第3回です。本日は「無言」ということについて考えてみたいと思います。

第1回で、お話ししたとおり、私の祖父は、金光教こうこう岡東教会の教会長をしております。教会の中でちよろちよろ遊んでいた子どもの私の記憶に、最も強く残っているのは、神前しんぜんの脇にある、お結界けっかいと言われる場所に座り、じっと信者さんのお話を聴いている祖父の姿です。祖父はただうなずいたり、「ああ」、「ふうん」などと意味のない言葉を発するだけで、信者さん

に向かつて何かを言い聞かせる、というようなことはありません。

左の耳で信者さんの言葉を聴き、それを神様に取り次ぎ、神様の声を右の耳で聴き取って信者さんに伝える。それが祖父の役目でした。つまり、お結界に座る者は、人間と神の通り道となるのです。

今から思えば、教会とは吐き出す場所、荷物を下ろす場所であり、祖父はその手伝いをしていたと言えるでしょう。

以前、臨床心理学者の河合隼雄かわい はやお先生と、『生きるとは、自分の物語をつくること』と題した対談集を出版しました。その中で先生が話してくださいだった、忘れられないエピソードがあります。ある時、先生は一人の高校生のカウンセリ

ングをしました。「どうですか」と言っても、下を向いて黙っている。そこで先生は、「いやあ、高校1年ねえ」と、分かりきっていることを言います。普通ならそこから対話が始まってゆくのですが、高校生は、「いやあ、高校ねえ」と意味の無い言葉を発して、また黙る。

でも先生は、話題をよそへ広げたりしません。その子の世界に留まるために、無言を受け止めます。無言に耐え切れず、無理矢理会話を成立させようとするのは、大人側の都合であって、本当に苦しんでいる高校生の心を置き去りにすることになるからです。

そうこうしているうちに、カウンセリングの時間が終わってしまいます。先生が、「今日はあまり話できんかったけど来週来る？」と言っ

たら、彼はニコツツとして、「はい」と返事をしたそうです。高校生には、自分の気持ちを大事にしてくれる先生の思いが通じたのです。無言だったにもかかわらず、自分にとって一番必要なものを受け取ったのです。

このお話を伺った時、私は教会のお結界を思い浮かべました。神様の声は無言です。本当なら聴こえないはずの声の真の意味を、どうやったら信者に伝えられるか。取次者とりつきしやに課せられた役割は、あまりにも大きいものがあります。

河合先生は、こんなこともおっしゃっています。

「人間は物事を早く了解して安心したい、だから勝手に物語を作ってしまう。それで最後に、『まあ、頑張りなさい』と言って、相手の問題

から降りてしまう」

取次者が言葉少なになるのは、神様の無言を自分の都合でねじ曲げたり、そこに余計な何かを付け加えてはいけない、という真摯しんしな気持ちがあるからに違いありません。ですから、私は教会にお参りする時、神様と先生と自分、そこに通い合う無言を、じつと噛みしめるように努めます。信者もまた、この無言に耐えなければならぬのだと思います。

そもそも、言葉にできないものでつながり合っているのですから、理屈でまとめる必要などないのです。なぜか、すくと気持ち落ち着いて、深く息が吸い込めるようになる。意味もなくありがたい気持ちになって、両手を合わせたくなる。それが私にとってのおかげの現れで

す。

河合先生が担当された方に、忘れ難いスケールの大きな患者さんがおられたそうです。その患者さんは、「私は治してもらったために来ているのではありません」と言われました。先生が、「では何のために？」と尋ねると、「ここに来るために来ております」と答えました。

大変なエネルギーを持った言葉です。ここに来るために来ている……。答えとして成立していないようでありながら、実は言葉の意味を超越した真理を表しています。

つまり私が信仰を持つのも、そこに来るために来ているだけであって、理由はないのです。時々、「なぜ金光教を信じているのですか？」と尋ねられ、うまく説明できずに戸惑うことも

あるのですが、答えられなくて当然です。あらかじめ用意された上^{うわ}辺^へのおかげをもらうために、信心しているのではありません。ただもう訳も分からず、理由も理屈もなく、無言の中に飛び込むようにして、神様に助けをいただいているのです。

今日はこのあたりで失礼します。次回は、読書をテーマにお話できればと思っております。では、また来週よろしく願いいたします。



《小川洋子の「私のひきだし」》

「かわいいと思う心」

皆さま、おはようございます。作家の小川洋子です。「私のひきだし その3」も、第4回を迎えました。今日は私にとって最も身近な、読書の話から始めてみたいと思います。

小説を読んでいると、登場人物に対し、何てひどい人だろう。自分ならこんなことは決してしないと軽蔑^{けいべつ}の目を向けたり、世の中にはこんな変な人もいるのか、と呆れたりする場合があります。しばしばあります。

例えば、留学先で出会った恋人を妊娠までさせながら、高級官僚の地位を捨てきれず、あっさり振ってしまう、森鷗外^{もりおうがい}『舞姫^{まいひめ}』の豊太郎。

立身出世^{りっしんしゅつせ}のため、真実の愛を求めつつも自滅してゆく、スタンダール『赤と黒』のジュリアン・ソレル。口を利いたこともない女性に、独り善がりの恋心を募らせ、自分は女に飢えていると繰り返して吐露する、武者小路実篤^{むしゃのこうじさねあつ}『お目出たき人』の主人公。などなど、挙げてゆけばきりがありません。

しかし、こんな人には付き合いきれないと、本を放り出してしまいうわけではありません。たとえ自分の考えと外れていようとも、最後までその登場人物に関わり続ける。それが苦ではない。むしろ、いつしか快感にさえなっている。そういう本こそが、読書の喜びをもたらしてくれる本物の文学です。

この人は気に食わない、気が合わない、間違

つっていると、切り捨ててしまつたら、もうそこでおしまいです。先へは進めません。読書の醍醐味は、自分とは異なる、自分の周囲にも

いないタイプの人間と出会うことにあります。

登場人物たちを自分の価値観で区別せず、とりあえず丸ごと受け止めてからが、読書のスタートではないでしょうか。

つまり本を読む時、私たちは自分の狭苦しい視界から解き放たれ、自由になれるのです。正しい、悪い、美しい、醜い、といった境界線などお構いなしに、自分では思つてもみなかった未知の世界を旅することになります。

ああ、いい小説だったなあ。読み終わった時、そう感じるの、登場人物たちがどんなに卑怯ひきょうでも、欲にまみれていても、間が抜けていても、

結局、それが人間なのだ、と納得させてくれる本です。

一つの言葉、一つの文章から広がる想像力には限りがありません。この想像力があるからこそ、私たちは知らない場所の風景を色鮮やかに思い浮かべたり、登場人物の声や姿を五感で感じ取ったりすることが出来ます。紙の中に描かれているだけの人物が、やがて立体的な存在感を持ち、何気ない一言や仕草の裏に隠された、書かれていない感情が伝わってくるようになります。その人が背負っている人生の重みに思いを馳はせているうちに、最初の頃感じていた拒否感が、いつの間にか親愛の情に変わっているのに気づかされます。すると自然に、人間は、なんて愛おしい生き物なんだろうと思えてきて、

他人も自分も区別なく許し合えるような気がしてくるのです。

金光教の教祖は、「かわいいと思う心が、そのまま神である。それが神である」とおっしゃっています。神様の前では人間は皆平等です。

神様は人を選び分けたりしません。私のイメージの中では、神様は人と同じ地平に立ち、すぐ傍らにあって、腰をかがめるようにしながら、その人を静かに見守っています。じつと耳を澄ませば、神様の息遣いが聴こえてくる、その温かみさえ伝わってくる。そこにあるのは、かわいい、と思う心です。

それにしても、かわいいとは、何と人間らしい感情でしょうか。まるで小さな子どもを前にした時、思わず抱き締めたくなるような、素直

な心です。そこには何の条件もありません。

私が小説の登場人物達に愛おしさを感じるのには、彼らもまた、かわいいと思われる神様の心に、抱き留められているのだと気付けるからでしょう。どんな人も、その人だけに与えられた運命を背負っています。誰も代わりになってくれる人はいません。しかし、その重荷に瞳を向け、自らの重荷を振り返り、つながり合うことはできます。そして何より、その人も自分も、神様のかわいいと思う一つの心に包まれているのです。

死んだ母の口癖は、「いろんな人がおる」でした。私が人間関係で落ち込み、愚痴をこぼしたりすると、必ず最後に、「いろんな人がおる」と言って、話をまとめるのでした。この一

言さえ唱えれば、どんな理不尽でも許せる、という口振りで、なぜか私も不思議とすっきりした気分になれました。

いろいろな人の存在を認める。他者を否定しない。その大切さを私に教えてくれたのが、信心と読書でした。

さて、来週は早くも最終回です。本日も聴いてくださり、どうもありがとうございます。



《小川洋子の「私のひきだし」》

「我（が）を去る」

皆さま、おはようございます。作家の小川洋子です。「私のひきだし その3」と題してお送りしてきました、この番組も本日が最終回となりました。

ここ数年私たちは、新型コロナウイルスの世界的な流行によって、様々な困難を経験しました。これほど科学技術が発達した現代社会にあってもなお、未知の生物に命を脅かされるのかと、改めて自然の厳しさを突き付けられるようでした。

抵抗する人間の裏をかくようにして、ウイルスは次々と変異していきます。自らが最も効率

よく生き残り、増殖してゆくために、人間を上手く利用します。人間だけが偉いのではない、目に見えない小さな生き物たちも、賢さを持っている。今回のパンデミックは、つい傲慢になつて忘れがちな真実を、思い出させてくれました。

生き物の進化の先頭に立つて威張っています。人間が一番賢いわけではないのです。小さなウイルス一個にさえ、振り回されている始末です。以前、東京大学宇宙線研究所の先生に、宇宙を構成している物質のうち、いまだ正体の分からないものが7割近くもあって、それらはダークマター（暗黒物質）と呼ばれている、と教えていただいたことがあります。それを聞いた時、人間を取り巻く謎の奥深さに圧倒されま

した。私たちは分からないことだらけの世界で、
どうにかこうにか、頼りない命の綱をつないで
生きています。

分からないのは何も外の世界ばかりではあり
ません。自分自身もまた、神秘的な謎の存在で
す。自分のことは自分が一番よく分かっている
などと、とても胸は張れません。むしろ、一番
理解不可能なのは、自分という存在かもしれま
せん。

3年ほど前、歯の治療をきっかけに、噛み合
わせが狂い、それにとらわれているうちに首が
痛くなってきました。歯医者と整形外科を何軒
も巡り、あらゆる治療をしましたが、痛みは強
くなるばかりで、一向に治る気配がありません。
とうとう横になったまま、立ち上がれないほど

の痛みに苛さいなまれるようになりました。そして、
最終的にたどり着いた心療内科の先生に、歯も
首も、どこも悪くありません。その痛みは、あ
なたの脳が勝手に作り出しているのです、と診
断されました。

えっ、これほど強烈な痛みが、幻だというの
か…。私は驚き、半分泣きながら、どうにかし
てください、これでは仕事になりません、と訴
えました。

「小川さん、あなたは今、仕事ができる状態
ではありませんよ」

静かに先生はおっしゃいました。その時、不
意に視界が開けたのです。どんなに痛くても、
私は仕事だけは穴を開けないように頑張ってい
ました。仕事を休む発想がありませんでした。

そこに、「休む」という選択肢が現れたのです。

つまり、体は休みたがっているのに、頭はそれに気づかない。だから痛みによって、体が私に信号を送っている。そう説明されて、深く納得しました。私には自分の体の声が聴き取れていませんでした。それを無視して勝手に無理を続けた結果、安全弁が外れたというわけです。

自分の心の内にも、宇宙と同じくらいのダメージがあふれているようです。先生の説明を聴きながら、人の体とは何と神秘的なのだろうと、ある種の感動を覚えました。と同時に、危機を知らせてくださったのは神様だ、と気づきました。神様が私に痛みを差し向けてくださったおかげで、初めて私は、「休む」という勇氣を得られたのです。

金光教の教祖、生神いきがみ金光大神こんこうだいじんの教えに次のようなお言葉があります。

「何事にも無理をするな。我がを出すな。わが計らいを去って神任せにせよ。天地の心になつておかげを受けよ」

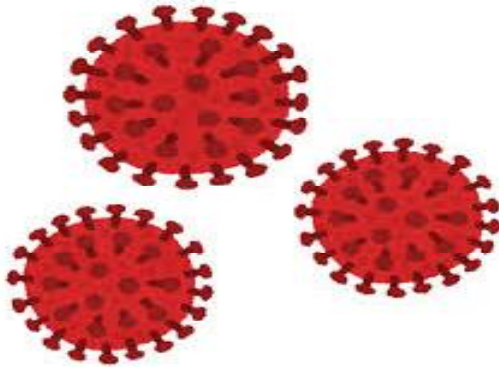
仕事を頑張っているつもりが、いつしかそれは我を出すことになっていたのかもしれない。編集者に褒められたい、売れる本を書きたい、皆からよくやっていると認められたい、そんなことです。自分のちっぽけな計らいにどこまでも、とにかく神様にお任せして、療養に専念することになりました。おかげで先生も驚くほど薬がよく効き、やがて首の痛みは去りました。

神様は全てご存知です。コロナもダメージも、一人ひとりの人間も、全ては天地の間に

受け止められています。そう信じる事ができれば、余計な心配をする必要などありません。

「ままよ」という安らかな心持ちになれる。そのことこそ、まさにありがたいおかげだと思っ
のです。

5 回にわたり、お話しさせていただいたのは、
金光教と私の素朴な心の関わりでした。たとえ
一言でも、お心に響いたものがあれば、と願っ
ばかりです。聴いてくださった皆さま、どうも
ありがとうございました。



《信者さんのおはなし》

「教会は私の一部です」

(ナレ) 大阪駅にもほど近い、オフィスビル街の真っ只中に静かに佇む、金光教真砂まきご教会。そこに、約2キロメートルの道を毎日歩いてお参りしている女性がいます。山内和子よしこさん、75歳。どんな思いでお参りをされているのか尋ねてみました。

(山内) やっぱり、お教会に来るとね、なんか違うんですよ。どこにいても神さんいてはねんから、ここだけにいてはるわけじゃないって、それは分かってるんだけど、空気が違うし、集中ができる。やっぱり神様、御みたま霊様に向き合

わしていただけるっていう、そういう場所であるのが、私にとってはありがたいですし、いろんな御用をしたいなと、思わせてもらえるところだし、やっぱりうれしいというか、楽しく御用させていただけるところが、ありがたいです。

教会にお参りするたび、山内さんは進んで掃除をしたり、花を活けたり、他の参拝者のお世話をしたり、教会のミニコミ紙を作ったりもします。こうした心配りができるのは、ある大きな商社で長年、社長秘書を務めてきた経験も手伝っているのでしょう。19歳で会社勤めを始めて2年後に父親と死別。一人娘だった山内さんは、母親を支えるためにも、人一倍真面目に働きました。

会社に入社した時は、配送の業務をしてたんですけれども、秘書の人がお辞めになって、だから最初は、両方ね、兼務みたいな形でやってたら、今度社長がね、「何かの時に頼もうと思ったらいい！」とか言っつて、怒りはって、まあ結局、それからずっと辞めるまで、かわいがっていただいて、長いことお勤めさせていただいたんです。48年間、同じ会社で。

しかし会社では、人間関係の問題で苦勞することも多かつたようです。

やっぱり、いじめもあつたしね。いや、私に對してのいじめじゃなくつて、後輩のいじめとかもあつたしね。そういうのは大変でしたねえ。

やっぱり、解決策が上手なんですよ、女のうてね。いじめたほうの人がね、男の人の上司にね、「あんなに言われてるけど、私はこうなんですよ」「そんな全然してないんですよ」とか言っつて、甘えて言わはつたらね、男の人はね、こつちの人が悪いように思いはるんですよ。そやからね、やっぱり怖いんです。ドラマのようなことは実際にあるんです。やっぱり何人が集まつたらね、意見も違うやろし、学校じゃないけど、えこひいきみたいに思いはる人もいるやろうしね。かわいがつてもらつてたらね。

山内さんはそんな時、いつも教会にお参りして、先生に話を聞いてもらいました。すると先生は、「困つた人だと思つても、決して切り捨

ててはいけない。神様にとっては誰もがかわい
い子ども。神様の心になつて、みんなを助けて
あげなさいよ」と励ましてくださるのでした。

金光教の教えに、「人を軽く見るな。軽く見
たらおかげはない」というものがあります。こ
れについて、教会の先生が、こんなことを言わ
れたこともありました。

「あんだ、どんな人と結婚したいんや」って
言わはってね。私は、引っ張つてくれる人がい
いとか、尊敬できる人がいいとか、いっぱい言
うたと思うんですよ。その時に、「もしもな、
このお道（金光教）の人じゃなかったらどうす
る？」って言いはったんで、「いや、それはも
う私がちゃんと、このお道におかげ頂かれるよ

うにさせていただけます」って言うたら、「あ
んなな、人はな、そんな簡単なもんやない。

『人を軽く見な、軽く見たらおかげはない』っ
ていうことを言つてはるやろ？ そうやで！」
つて言わはって、こういうことも、人を軽く見
なつていうことに繋がるんやなあと思ひました。
自分が人を偉そうに変える…。そういうことも
教えてもらいましたね。

このようにして教会の先生は、人を大切にす
る心を丁寧に教えてくださったのです。

だから、自分ではね、気のついたところを片
付けたりとか、人のできないところを助けてあ
げたりとかいうことは、させていただけいたけど、

それが目に見えて、皆さんに通じたかどうかというところは、ちょっと疑問です。ただ、人間関係が難しいといえますけどね。でも、誰とでも、仲良くさせていただけたっていうのは、ありがたいことやと思ってます。

生活上のあらゆることについて、教会で先生にお話をし、そのたびに優しく、時に厳しく、教えを受けながら生きてきました。このような信心の仕方を教えてくれたのは母親でしたが、その母親もすでに亡くなり、結婚しなかった山内さんは、今は独り暮らしです。でも、教会があるから寂しくないと言います。

御霊さんは、すごい守りきってくれてはるな

あとと思いますね。神さんはもちろんですけど。

今、本当にありがたいことばかりなんです。自分のことをね、願わなくていいんですもん。私のことはね、皆さんが願ってくれてはるから。それよりは、人のことを少しでも願わせてもらって、お役に立ちたい。

もう、お教会は自分の一部です。這うてでもお参りしたいです、もう年取って。もうここでどっちか言うたら泊まりたいぐらい（笑）。

山内さんにとって、教会参拝は親の待つ家に帰るようなものなのでしょう。そして、そこで心の安らぎを得て、神様のお役、人のお役に立てるのが、何よりうれしいことなのです。

とかく孤独に打ちのめされたり、生きる意味

を見失いそうになつたりしがちな現代ですが、
案外あなたの近くにも、こんな場所があるかも
しれない、ということを中心に留めておいてくだ
さい。



《信者さんのおはなし》

「ニコニコ笑顔ができる人」

(ナレ) 福岡県金光教直方教会のものがたにお参りする

佐藤千香さとうちかさん、54才。ニコニコ笑顔が素敵な女性です。その笑顔からは想像できないような、生死に関わる大病を経験されています。

(佐藤) 23歳の頃に、転職を考えて、ハローワークに行きました。募集要項の中に、「ニコニコできる人」って書いてある会社があって、すぐ採用していただいて働き始めたんですけども、お客さんにはとっても誠実に、従業員も大切にしてくださいるところでした。

一年半ほど勤め、千香さんは結婚しました。

誠実な人柄に惹かれて結婚を決めたご主人は、金光教の信者さんでした。ご主人がお参りする直方教会で結婚式を挙げ、その後、千香さんも自然と教会へお参りするようになりました。

後になって分かったことですが、「ニコニコ笑顔」という言葉に惹かれて働き出した会社は、実は、金光教の信者さんが経営する会社でした。ご主人と出会う前からすでに金光教と縁があり、大きな力に守られているように感じると言います。

教会参拝させていただくたびに、先生の言葉一つひとつが、すぐくすつとしみ込んで、涙が溢れてくるようなことが多かったのを覚えてい

ます。

ご主人と始めた整骨院で働きながらの新婚生活でしたが、ある時、頭がひどく痛むので、検査を受けたところ、右の鼻の中に腫瘍しゅようが見つかり、手術をしなければならなくなりました。不安もありましたが、出会いを通して、千香さんは大切なことに気づきます。

大病院から来られている先生がいらっしやうって、偶然、その先生と出会えたことで、初めて病気を見つけていただいたということになりました。

他の入院患者さんと友達になったり、お話をしていくなかで、一人の方と知り合いました。

その方は、脳腫瘍だったんですが、頭の奥のほうにあつたので、手術ができないということで、私に、「佐藤さんは、手術で取れるから良かったね」と言ってくださって、「手術ができることと体がありがたいんだよ」ということを、神様が教えてくださっているんだなあと思えました。

大手術だったと思うんですが、教会の先生にお任せするように教えていただいたので、周りのスタッフの方や神様にお任せする気持ちで、安心して手術台に上がらせてもらいました。

手術は成功し、仕事にも復帰できました。ところがその翌年、今度は、卵巣らんそう腫瘍しゅようが見つかったのです。けれども、千香さんは、「どうして、

また病気になったのだろう」とは思いませんでした。前回の手術と同様、手術は、「できることがありがたい」ことであり、教会の先生や家族の祈りに守られていることを感じられたからでした。

仕事に子育てと、忙しくしていたある日、今度は、胃のあたりが激しく痛み、病院に行きました。

初期の胃がんだろうということで、大きな病院を紹介していただきました。不安だったんですけど、教会にお参りすると、先生が、「これから整骨院に来られる患者さんの痛みとか、苦しみとかをあなたに分かってもらうために、神様がさせてくださるんだろう。何でも良いほう

に良いほうに受け止めて手術を受けてください」と言っていた。

それから、大きな病院に向かいました、先生が、終始ニコニコ笑顔だったので、ちょっとほっとしてしまっただけ、お任せしようって感じになりました。翌日、胃カメラの検査を受けたんですけど、検査をしてくださった先生が、これまた、「99パーセント治りますよ」とおっしゃったので、「そんなに断言してもらったんなら大丈夫だ」と思えて、勇気をもって乗り切ることができました。神様からの言葉だったのかなと思いますね。

不安な時は、インターネットで調べてみたりして、悪いところばかり自分で拾い上げてですね、勝手に心配を大きくしていただけで。教会

長先生がいつもおっしゃってる、「心配する心で信心せよ」で、手術していただく覚悟ができました。

胃を全摘する大手術でしたが、無事に成功し、順調に回復。お腹に大きな傷が残りましたが、千香さんは、その傷を見るたびに感謝の気持ちを思い出します。

先生方や、両親や姉弟とか、周りの信者さんたちにもお祈り添えを頂いたし、皆さんへの感謝の気持ちとか、お世話になっっていること、すぐ忘れてしまうので、それを忘れないように、体の中心に大切な印を、神様が付けてくださったのかなと思います。

胃がんになる前は、自分自身が生活を回していくのがきつかったので、ニコニコが足りないし、子どもたちにもきついことを言ったり、怒ってばかりだったからですね。

教会長先生は、手術中ずっと祈ってくださいてるし、私のために、家族でもない方がそんなことしてくださるなんて、びっくりしましたし、すごく心強いので、恩人ですね。やっぱり教会に来るとほっとしますね。ずっと私、祈られているんだなあと思うと、ありがたいですね。

ネガティブ思考な私にとっては、「心配する心で信心せよ」という教えは、魔法の言葉のような感じですね。

以前の千香さんは、不安がない時や、求めら

れた時にはニコニコ笑顔ができる人でした。だから、不安な時やつらい時には、笑顔が作れない時がありました。しかし、教会にお参りし、心配を一人で抱え込むのではなく、心配する心をそのまま神様に預けることで、どんなことも乗り越えられると実感した、千香さん。

いつしか、心からニコニコ笑顔ができる人になっていたのです。



《信心ライブ》

「おくりもの」

(ナレ) おはようございます。今日は金光教

伊勢教会の高阪健太郎さんが、令和4年12月に金光教本部で、お話しされたものをお聞きいただけます。

高阪さんは、その年、お父さんを亡くされました。そして、胸に迫るあれこれをお話しされました。今回、お聞きいただくのは、そのお話の冒頭部分です。お話には、「おくりもの」というタイトルが付けられています。どのようなおくりものだったのでしょうか。

(高阪) 5月26日、午後10時53分、父の85年の

現身の生涯が幕を閉じました。

しかしながら、このたび、ご本部から、「7月20日付けにて霊神として、本部広前に奉斎されました」とのご通知を頂きました時、私は、父が生きているように感じました。と言いますのも、その7月20日は、存命なら父の86歳の誕生日だったからです。「形は変わりましたが、私は生きておりますよ」。遺影の父が、あたかもそれを伝えにきたように感じました。

父の告別式を仕えることになった、5月29日は、図らずも私の59歳の誕生日でした。葬儀社やもろもろの都合からでしたが、まさか自分の誕生日に、父の葬儀を仕えることになるとは、想像もありませんでした。けれども、それが父からの最後にして最高のおくりものだと気づくの

に、時間はかかりませんでした。

葬儀の準備も一息ついて、私は前から気になっていた『備忘録』と書かれた、父の小さなノートを手に取りました。引き出しにあるのは知りながら、どこか触れがたく、それまで中を見ることができませんでした。

開いてみると、意外にも、そこには父の「死生観」といえるものが書いてありました。

その中の一つを読みます。

「老いには、苦痛や孤独、悲惨などが付き物である。それを嘆けばきりが無い。しかし、見方を変えれば、それを受け止め、味わい、耐えることは、長く生きた者、つまりは老いた者の義務であり、責任である。いわば、ノブレス・オブリージュである」

ノブレス・オブリージュ？ 調べてみると、

フランス語で直訳は、「高貴さは強制する」となり、「位高ければ徳高きを要す」または、

「地位の高い人の義務」とされる言葉でした。

「老い」ということを地位や高貴さに例え、それが長く生きた者、老いた者の義務であり、責任であるという、父の覚悟の言葉でした。

父は、4年前から、T細胞大顆粒リンパ球性白血病を患い、ここ一、二年は毎月、輸血を要する体でした。ただでさえ細い体で、「この数値では普通は倒れますよ」と医師に宣告されながらも、日常はどうか過ごしていました。父をいつもそばで支えてきた母も要介護施設のお世話になる身となり、自室で独り過ごす、そんな時間が増えていく中で、病と老いに伴う

さまざまな苦痛、孤独、悲しさを抱えていたはずです。けれども、それらを嘆くことは一切なく、傍らにはいつも『(金光教)教典』があり、時々私が部屋をのぞくと、食い入るように読んでいる、そんな父の姿がありました。

くしくも、父の告別式に重なった私の誕生日。これから私は命ある限り、誕生日のたびに、父とお別れをした、この日のことを思い出すのだろうと想像しました。ここまでどう生きたか、ここからどう生きるか。私は来年還暦ですが、やがて老いゆくその在り方をも、父に見られていくような気がしています。

ノブレス・オブリージュ。ある対談では、「生まれながらの地位に限らず、例えば財産に

恵まれたなら、困っている人や社会のために使わなければならないと申し訳ないという心理だ」と語られていました。恵まれている自分何ができるか、ということでしょうか。

ノブレス・オブリージュという言葉から、地位や高貴さに並べて語られた老い。賜り物として受け止められた老い。そのように老いを受け止めようとし、事実、そう受け止め、生き抜かれた姿が目に見えかぶようです。そんな老いを生きる姿とそのことを支えた言葉を、高阪さんは、「おくりもの」と受け取られたのでした。

また、事情が重なり、葬儀を自身の誕生日に仕えることになったこと。金光教本部に霊神として祀られた日が、お父さんの誕生日と重なったこと。それぞれの誕生日に、葬儀や奉斎され

た日が重なるという偶然に、偶然以上のものを
感じておられます。

この出来事を通して、高阪さんに、「どのよ
うに生き、老いていくかまで見られていく気が
する」と感じさせる働きに、「図らずも日付が
重なる偶然の背後にある神様」を思われたこと
でしょう。

それゆえに、その日が来ればお父さんのこと
を思い出すに留まらず、信心と共に思われる、
「どのように生きるか」という場面で、確かな
お父さんの眼差しを感じておられます。

「おくりもの」。老いを生きる姿と、そこに
あった覚悟の言葉をお父さんから、日付が重な
る偶然を神様から、これからをお父さんと歩ん
でいくことの確かさを信心から、受け取られた

のではないでしょうか。

このように関係が結び直され、これからを生
きることに深く根ざした、新たな関係が生まれ
てきたことは、信心なればこそのことと私には
思えるのです。

《もう一度聞きたいあの話》

「ともに立ち行く」

兵庫県・社教会 小林健こばやしけん

(平成2年1月31日放送)

私達は、とかく独り善がりに物事を考えてしまふことが多く、皆が共に揃って良くなる道があるにもかかわらず、自分で勝手に決め込んで、腹を立てたり、愚痴を言ってしまうことがよくあります。

3年前の年の暮れのこと。Kさんという、60歳前のご婦人が教会へ参ってこられて、このように言われました。

「私は、『そんなことはほっとけばいいじゃないませんか』と言うのですが、主人が、『腹

が立って、腹が立ってしょうがない。何度も頼みに行くのだが、とんとこつちの言うことを聞いてくれない。こんなにかつちが困っているというのに、強情な人だ』と言って、そりゃカンカンになって、挙げ句の果てには、『もう神も仏もあるもんか』と言うのです」

そのKさんの主人という人は、ある会の会長もなさっておられ、町内のまとめ役もこなされるすっかりしたお方なのです。

私は、「一体どうなさったのですか」と、お聞きしますと、「実は、うちの田んぼの脇道に大きなポプラの木が5本あります。そのポプラの木が、稲の育ち盛りの時、ちょうど一番茂りまして、日光を遮ってしまふのです。その上、冬には、たくさんの落ち葉でうちの田んぼが一

杯になって、その清掃がえらいことなのです。

それで、毎年、今頃になると、主人は先方に、

『あのポプラの木を切ってくれ』と言って頼みに行くのですが、そのたびにきつく追い返されるので、いつもあのように腹を立てては、私に当たるのです」と言われる。

さらによく伺ってみると、その問題のポプラの木は、もともと先方が、以前、牛をつないでおくために植えたものですが、今では農業も機械化されましたから、用はありません。しかし、先方としては、別に邪魔になるわけではないし、また、切るということになれば、手間も費用もかかるわけですから、自分のほうで切るつもりは毛頭ありません。

私は、「それはさぞかしご主人にはお気の毒

なことでしょうね。日が当たらなければ良い米はできませんし、落ち葉の片付けも大変でしょう。それにしても、ポプラの木も迷惑な話ですね」と申しました。

それは、人間同士にも言い分はありましようが、ポプラの木にも言い分はあるでしょう。人様のお役に立つために植えられた自分が、今、他の人の邪魔になるからといって切り倒されようとしている。夏には、日陰を作って休息の場を提供できるほどに立派になったわが身が、この世から突然、抹殺されようとしている。たまたものではない。ポプラの木自身には、何の非もありません。人間様の都合で自分の運命が決められようとしているのです。

そこで私は、「切る、切らん、という問題も

ありますけれども、ポプラの木の命も大切に
してやらねばなりませんね」と申しました。そし
て、その時ふと、次のような話を思い出しまし
た。

それは、金光教の教祖・金光大神こんこうだいじんの元に、あ
る人がお参りになりました、「金光様、腹が立
って腹が立ってなりません。隣の田んぼの持ち
主が、あぜの境をこっちへ勝手に広げてきて、
もう悔しくて」と言われた時に、金光大神は、
「そうまでして人の物が欲しい者にはやってお
けい。負けて勝つということがあろう。六年辛
抱せよ。神が境をいらぬようにしてやる」とお
っしゃいました。その方は、一体どうなるので
あろうと、続けて信心をして、さても6年経
ちますと、先方が自分の田んぼを買ってくれと

言ってこられたのでした。その方は、神様の手
際よさに感服されたのでした。

私はこの話をとっさに思い出し、Kさんにそ
のことをお話しして、「心配いりません。神様
がきつと良いようにしてくださいませ。あなた
の主人だけが良くなっても、先方がそれで腹を
立て、逆恨みを買うようなことになっても困り
ます。皆が揃って良くなり、立ち行くように神
様にお願ひしましょう。そして、先方を悪く思
わず、先を楽しみにして、そのポプラの木をし
っかり拝ませていただきましょう」と申しまし
た。Kさんは、「分かりました。帰りましたら、
主人にもそのように伝えます。よろしくお願ひ
します」と言って、帰られました。

金光大神は、「四季の変わり人は人の力に及ば

ぬことぞ、物事時節に任せよ」と、み教えくださっておられますが、それから2年後の春先、Kさんがはずんだ顔をして参ってこられ、「先生、神様はありがたいですね。あのポプラの木を切ることになりました」と言われるのです。

しかも、全部切り倒してしまうのではなく、下から5メートルを残して切ることになったということなのです。「実は先生、電力会社の方が先方にお見えになりました、『お宅のポプラの木が大きくなりすぎて、今にも電線にかかりそうになっている。このままでは障害になるので、切らせてもらいたい。手間も費用も会社で負担するから』と言ってこられたのだそうです。それはもう、主人は大喜びで、神も仏もあつたものじゃないと言っておった人が、手のひらを返

したように、『神様はえらいもんじゃ』と言っております」と話されたのでした。私も共に喜ばせていただき、神様にお礼を申し上げました。Kさんのお宅も、先方も、共に立ち行くことになり、ポプラの木も切り倒されずにすんで、本当にありがたいことでした。

金光教祖は、人も自然も生き物も、皆が良くなっていくことを、「共に立ち行く」「あいよかけよで立ち行く」とおっしゃっておられます。神様のお恵み、お働きを頂いて、全てのものが、「共に立ち行く」世界の顕現を、神様はいつも願われているのです。



《信者さんのおはなし》

「せっかく頂いた命やから」

(ナレ) 自然豊かな和歌山県九度山町くどやまに住む、74歳の山本やよいさんは、夫婦で金光教の教会にお参りするのを毎日の楽しみにしています。しかし、結婚するまでは、自分が信心することになるなんて、想像もしていませんでした。

(山本) 宗教に対して、ちょっとアレルギーっていうんですか、元々、母がすごく苦労して、「神や仏があればこういう苦労はない」「神さんていうのはない」って、小さい時からしょっちゅうそういうことを口癖のように言われてたんで。

熱心に金光教の信心をしていた夫の母が、何度かお参りに連れて行ってはくれましたが、自分から信心する気にはなりませんでした。しかし、やがて転機が訪れます。

36歳の時にしこりができて、乳がんという診断を受けて、その時に初めて主人と二人でお参りさせてもらって。そしたら女の先生でしてね、お祈りしてくださって、はらはらと涙を流されてね。で、「今まで36年間元気でこさせてもらったお礼を申しなさい。手術は神様がします。だから心配はいりません」っていうふうなことを言っていただいて。その時に、その言葉がほんとにスーッと入ったんですね、体の中に。不思議な感じで。元気にこさせていただいたお礼

を申しなさいって言うて、ああ、そういうふう
に言われるんやなあと思うて。ほんとに元気に、
貧乏の苦勞はしたけれども、健康でこさせても
ろてたなというような、初めて気づいたとい
うか。ありがたかったですね。だからもう本当に
不安っていうようなことは全然なく、手術をし
ていただいて。

信心に対するやよいさんの思いが、この時か
ら大きく変わりました。さらに教会の先生のこ
の一言が胸に響きました。

「病気でおかげを頂いた人はいっぱいいてる
けども、嫁姑が仲良くいってるところはほんま
に少ないから、その見本になりなさい」と言う

ていただいた。

この言葉によって、信心の大切さを知らない
自分のことを、辛抱強く祈り続けてくれていた
姑の優しさが、心からありがたく思えたのです。
こうしてやよいさんは、家族や教会の先生の
厚い祈りの中で、乳がんの手術を受け、約一カ
月の治療を終えて、無事退院することができま
した。ところが…。

帰ってきたら、脇の下のこのリンパ節がまた
膨れてきて、こんなことあるかなってというふう
に。そしたら教会の先生が、「1回でスツと行
くよりか、こういうことを経験させてもらうほ
うがありがたいんですよ。より神様のおかげが

分かりますよ」って言われて、いつも何かあるたびに先生に祈られてお言葉を頂いて、それを頼りのおかげを頂いてたんです。

先生は、やよいさんが希望を失わないよう、いつも問題への粘り強い向き合い方を教えてくださいます。数え上げれば、これまでに5回の入院生活を経験し、深刻な命の危機も3回乗り越えてきました。病氣以外にも、大けがをしたり、子育てのこと、仕事のことなど、さまざま問題がひっきりなしに起きてきます。しかし、それらを通して、家族の絆はいっそう強まり、人を思いやる心も深まっていきました。そして、神様の慈しみの中に生かされている幸せに目覚めていったのです。

本当に信心がなかった頃の自分と、神様を頂いてからの自分というのは、もう全然変わったたんですね。それまではそんな、ありがたいが何か全然わからなかったですね。自分を中心に世の中は回ってる人と違うかなって思うぐらいワガママで、そういうふうに来たんですけども。今日も起こしてもらってありがたいな、トイレに行かしてもらってありがたいな、お食事頂けてありがたいなっていうふうな、一遍にはならなかったんだけど、先生と出会わせてもらって、一つひとつ教えていただいた、そういうふうに思わしてもらおうようになったんですね。

やよいさんは、今も病院に通い続けていますが、病気をどのように捉えているのでしょうか。

みんなそれぞれ、そこを経験しないと、前に進めないというものがあると思うんですね。だから、起こってくることに對してあんまり心を煩^{わづら}わさんことですね。自分が心配したり悩んだ

りして治るもんでもない。それやったら、当然通るべき道やと、積極的にそういうことを受け入れるっていうんですか、自分で。「なんでこんなこと」にはなくて、「私は今、病院でお

れっていうことやな」とか、「この病気を体験しなさいということやな」というふうに、積極的にその病気と、お友達になっていくというか、そんなふうになったほうがいいような気がしますね。病院生活も自分の生活の一部やから、あんまり自分で、「ああ、いついつに退院した

い」とか思わんと、もう受け入れていく。「ま

だ帰られへんで」って言われたら、「ハイ」って素直に聞いていく。病院で働いてくれている先生、看護師さん、お掃除の人、その人らにね、やっぱり感謝する。お水一杯、点滴の薬一滴、それらに、「ありがとうございます」と言える自分になっていく。それがね、ものすごく大事と思つて。

やよいさんは、日頃、自宅のガレージを利用して野菜の委託販売をしています。お客さんの多くは、野菜を買い求めるためだけでなく、やよいさんの明るい人柄に惹かれて、店を訪れているようです。

「山本さん、いつも元気やなあ。どんなした

らそんな元気になるの」とかって、本当はいっぱい病氣抱えてるんやけど、そんな言わへんから（笑）。ようそんなこと言うてくれたり、それも本当に神様のおかげで助けていただいてるなと思います。ややこしい体ですけども、せっかく頂いた命やから、どんだけ生かしてもらうか分からんけど、お役に立たしてもらいたい、人様に喜んでもらいたいっていうその思いですね。

人間が生きていく上で、神様を信じることがいかに力強い支えとなるか、やよいさんはそのことを、身をもって教えてくれています。



《信者さんのおはなし》

「僕の居場所はここにある」

(ナレ) 東京都の金光教本郷教会ほんごうに参拝する

薊あざみまさゆき正行さんは現在、スーパーの青果コーナーで

働く23歳、明るい笑顔が魅力的です。中学2年生の時に、軽度の発達障害と診断されました。

子どもの頃から親に連れられて教会に参拝していた正行さん。今は亡き前の教会長、西村にしむらよしお淑夫

先生は、孫のようにかわいがってくださいました。いいいます。今日は正行さんに本郷教会でお話を伺いました。

(薊) 僕がお母さんのお腹の中にいる時から、もうすでに親のほうがこちらに來させていた

いていたので、主に遊んでもらったという記憶、おじいちゃん先生と遊んだことが、やはり思い出に残っています。幼少の頃から遊んでもらっていたので、心の優しいおじいちゃんというか、おじいちゃんなんですけど友達感覚。「おー、来たか」みたいに迎えてもらえて、それで遊ぶという流れで。ここに來れば必ずおじいちゃん先生という遊び相手がいたので、ウイウイとして來てましたね。

そんな明るい正行さんでしたが、小学生の時に不登校になってしまいます。原因は授業スタイル。先生や黒板の前に机を並べて授業を受け続けることが、正行さんにはどうしようもなくつらかったといいます。

大っ嫌いでした。小学校一、二年生くらいまではしっかり通ってたんですけど、三、四年生くらいから、学校というか、授業の前向きのシステムが大っ嫌いすぎて。じっとしてはいられるんですけど、前向きの授業の姿勢、あの体勢が嫌いで、小中学校は本当に不登校で。でも、学校は嫌いなんですけど、テストの時とかは必ず出席するんですね。点数がとれる、とれないは置いといて。

普通は、友達付き合いがうまく行かなくて不登校になるらしいんですけど。僕の場合、クラスメイトとの関係は良好だったんです。話す時は話すし、遊ぶ時は遊ぶし。行ったら行ったで過ごしやすい環境だったかなと、今、自分では感じます。

中学三年生の時、いよいよ受験シーズンを目の前にして、高校見学に出向き、正行さんにとって一番いい学校に巡り合います。

学園祭をやっている最中で、事務室に通してもらって、軽い面接をして、推薦とかはもらっていないんですけど、「自己推薦でいいよ」と言われたので、一応推薦枠、自己推薦って枠で行かせていただいて。受験の時も、面接と、あと個人で持ってくる作文を提出してって感じで、行ったら、受かってました。

高校の授業はゼミ学習って感じで、前向きの授業は、一週間に一回だけだったので、個人的にはやりやすい。自分と同じような経歴を持つてる人達が集まるところだったんで、勉強でき

なくても、周りと雑談してても、あまり咎められず、本当に伸び伸びとやれる感じで、非常に行きやすかったですね。中学生の頃の先生との掛け合いがなんだったんだろうと思うくらいに。みんなと一緒に馬鹿やって、三年間留年もせず、奇跡的にあまり赤点も取らず、「金光様、バンザイ」と。ウキウキルンルンみたいな。

本郷教会では、金光教フォーゲルという活動に取り組んでいます。フォーゲルでは、集会やキャンプなどを行い、青少年の交流を通して心身を育てるといふ願いのもとに、活動を進めています。正行さんは、このフォーゲルに身を置いたことも大きかったと言います。

子どもと一緒に遊ぶことは好きです。やっぱり気が合うというか、波長が合うというか、そういう感じになるんですかね。大人と付き合ったり、話したりするよりも、子ども特有の感覚というか、それに触れてるほうが、精神的な疲労は小さくて。楽しく疲れるというか、肉体的にも精神的にも。周りの子どもたちとか見ると、「将来、俺みたいになるなよー」とか言ったりして。子どもたちが成長していく姿を見たりとかしてるのが楽しいんです。

金光教には「人間は皆、神様の愛しい子ども」といふみ教えがあります。母の洋子さん（ようちこ）も、次のように語ります。

「フォーゲルの皆さんが、正行のことを理解

しようと、自分のこととして考え、大切に育ててくださいました。正行も自ら人の輪に入るようになり、たくましさも勇気を頂きました。周りに頼りっぱなしではなく、自分で責任を持って活動できるようになりました」

フォーゲル関係の人達で、うちのお母さんと同年代や後輩の人たちには面倒見てもらったんで、影響されてるところは少なからずあると思います。

正行さんは、教会参拝やフォーゲルの活動を通して、自分自身を生かす術を身につけました。それは亡くなったおじいちゃん先生や、家族、教会やフォーゲルの方たちの祈りと見守りの中

で育まれたものだったのでしよう。

正行さんにとって、大きな安心感に包まれる居場所。教会やフォーゲルは、正行さんが正行さんらしく輝けるように、神様が用意してくださいました。

正行さんは今日も、明るく元気に朗らかに、教会へ、仕事へと出かけます。



《信者さんのおはなし》

「Welcome」

(ナレ) 東京都下北沢にある北沢教会きたざわの中畑なかはた

健一けんいちさんは、親しみやすく、誰をもウエルカム

で迎えてくれる温かい笑顔の方です。

中畑さんは、熊野古道くまのこうどうで知られる山間から、

田辺市の工業高校を卒業し、建築設計士を目指

し東京へ出てきました。38歳の時、二人の娘と

暮らすシングルマザーの吉子よしこさんと知り合い、

結婚しました。その時、中畑さんご夫妻は、18

年後、教会で暮らすようになるとは夢にも思っ

ていませんでした。

(中畑) 吉子さんと結婚するに当たってご両親

にあいさつに行ったら、「金光教大崎教会おおさき」と書いてまして、金光教については全く知らなかったですね。

中畑さんはそこで、当時、大崎教会長だった吉子さんのお母さんと、お兄さんに対面しました。

結構いいイメージだったんですよ。イメージ的には、自然をとっても大切にする宗教。そんなイメージを持ちながら、けれども、金光教的には信心が全く進まなかった。だけど仕事がなくなってきたら吉子さんが、「教会に行ってお願いでこよう」と言うんですよ。金光教ではそれが普通なんでしょうけど、僕は信心気がな

かったもんですから。それよりも吉子さんのお母さんに話さなくてはいけないというプレッシャーがあつて。娘を嫁にやった、結婚したのに、仕事がないのかという。仕事がないことを、とても言いにくかつたですね。

とりあえず渋々着いていくんです。そうすると、帰りに電話が鳴るんですよ。「仕事があるよ」って。不思議なことだらけですね。

それから中畑さんは、大崎教会の新築、設計に仲間と共に関わり、教会にたびたび足を運ぶことになります。

そして、結婚してから18年を経た、2010年3月、転機が訪れました。二人の間に生まれた娘と共に、後継者のいない教会に親子で住む

話が持ち上がります。本当に思いがけない話でしたが、吉子さんが意を決して金光教の教師になり、北沢教会での新たな日々が始まりました。その年の8月の夜、中畑さんは、突然尿が出なくなり、お腹の痛みに苦しみます。膀胱がんでした。

怖かつたですね。でも、夜中2時頃に、「こは教会だ」と気がついたんですよ。それで2回から広前へ降りてきて、一人でご祈念してみようと思つて。それでやってみたんです。

中畑さんは、神様のお名前である「生神金光^{いきがみこんしょう}大神様^{だいじん}」と繰り返しお唱えしていました。

ずっと続けていたら、肩からスーッと撫でられるような感覚があったんですよ。それはもしかしたら汗だったかも知れない。夏でしたからね。それはなんとも言えない感じがあって、それが僕には撫でられたように感じた。そうしているうちにいよいよおしっこが出る。ぱんぱんだからちよつと油断しただけで、ダーって出たんですよ。「出たー！」と思いました。「すごい神様！」って。

そこからですよ、変わっていったのは。これは、お前このままじゃあかんでって。これが神様の存在っていうんですかね。

神様の存在を実感し、中畑さんは、物の見方が変わっていきます。

後から考えれば、ほんとに病氣を通して、今、自分があるんだからって。悪いことは起こってきたけれど、それが良いほうへおかげを頂いたということになっているんだろうなと思います。今まで、僕はそんなことは全く考えもしない生き方をしましたから。自分本位だし、好きなように夜は酒飲みに行つて、儲けたお金はほとんど使つて、月末にはほとんどない。ろくな生活をしていなかったんですよ。それから比べれば雲泥の世界に飛び込んできている。信心がないとできない。病氣がなかったらだめだったかも知れません。

その後中畑さんは、手術をしました。そして、このことをきっかけに人生の軌道修正をしてい

くことになり、神様がぐっと身近な存在になっていきました。

受け損なっているんですよ。神様が教えてくれたんだなと思いましたが。大きな事ばかりに目が行くかも知れないけど、そうじゃない。もっと身近な、ほんとに身近にいて教えてくれるんじゃないか。それを受け損なっているのが、普段の私たちであって。だから本当に身近にいるんだよって実感するんですね、そういうのってね。やっぱり稽古しないと、うっかりしちゃうんじゃないかなと思うんですよ。身近にいます。必ずいます。身近にね。

その後も、思わぬことが起きてきました。独

立する以前からずっと付き合いのあったお客さんに、発注のミスが重なり、出入りを禁止されるという出来事がありました。が、神様の思いを受け損ねることのないよう信心の稽古を進める中で、思ってもいなかった国土交通省の仕事、車検場の仕事を新たに請け負うことになったのです。

ほんとすごいな。仕事のこと、全てのことを何か道筋があって歩いていていう。それで、これからどういう展開になっていくんだろう。この1年がすごく楽しみであるんですけどね。

金光教を全く知らなかった中畑さんが、神様に導かれて、神様の敷いた道筋を歩み、どんな

ことども、Welcome! 神様を信じ、先を楽しみに
思う気持ち、あの素敵な笑顔になっっているの
だと思わされました。



《信者さんのおはなし》

「土（どろ）の心」

（ナレ）福岡県金光教箱崎教会にお参りする

次賀慎一朗さんは、現在51才。代々、金光教を信仰しており、小さい頃から当たり前のように、教会へ参拝していたのですが、年を重ねていくにつれ、教会に行くのが面倒になったと言います。

やがて、役者の道を志し、実家を離れて上京。金光教からも離れていきました。

役者の道では、すっかり稽古に取り組むことの大切さを学びました。しかし、そんな充実感とは裏腹に、日々のお金のやりくりや、人間関係には苦労したと言います。

そんな時はいつも教会の夢を見ました。そして、小さい頃に教会で習った、「土（どろ）の心」という教えを思い出すのです。

（次賀）「土（どろ）の心」というのを習っていて。昔で言う、田んぼの泥なんでしょうけど。肥やしとして、人の排泄物や何かを捨てられたり、いろんなことを受けるけれども、それを黙って受けて自分の肥やしにして、そこから、新しい生命が育まれて生まれてくるっていう。このことを習っていたので、何かやっぱり、俳優の時にですね。自分にとって不都合なことだったりとか、嫌な人だったりとかが現れた時に、ふとそういうことが思い返されるんですね。

金光教と距離を置いたつもりが、金光教が自分を支えてくれている大切なものと気づいたそうです。自分にとって都合の良いことも悪いことも受け止めて、肥やしにしていく、「土（どろ）の心」は、次賀さん自身を育みました。

そして、20年が経ち、役者をやめ、家業を継ぐ決意をしました。実家に帰り、親が毎日欠かさず教会にお参りしている姿を見た次賀さんは、この親に失礼な生き方をしたくないと、毎日、教会へお参りするようになりました。

その後、役者時代に知り合った女性と結婚。幸せな日々を送っていましたが、もう一つ、かなえない夢がありました。それは子供を授かること。しかし、4年経っても、その夢はかないませんでした。

「子供を授かりますように」と、夫婦で必死に神様に願い続ける稽古に取り組んだのですが、授かりません。知人から赤ちゃん誕生の知らせが入るたびに悔しく、素直に祝えない自分の心に苦しみました。それでも、願うという事はやめませんでした。

教会で神様に、ありのままの正直な気持ちを吐き出すことで、折れそうな心が不思議と修正され、また頑張ろうという心になりました。

願っていたら安心かって、そうではないんですけれど。決してそうじゃないんですけど、願うこと。本当にどうすることもできないんだけれど、願うっていう手段があるっていうことが、本当に救いだったという感じですね。

親に習って始めた教会参拝も、いつしか自分の心のよりどころになっていきました。

そして、転機が訪れます。

まあ、実は去年まで、具体的に不妊治療に踏み切ったことがなかったんですね。ずっとタイミング療法で。去年、不妊治療に保険が適用されるということになった。ただし、それは上限42歳まで。その時点で妻は42歳。それで、妻の目の色が変わったというか。もうここしかないと思ったんでしょうね。「やるわよ」って。

本格的に治療を始めることにしましたが、どの病院に行けば良いか分からず、改めて神様に願いました。するとある日、知人から、北九州

市折尾おりおの名物、かしわめし弁当をもらいました。さらにその2日後、教会にお参りすると、先生から、「不妊治療には折尾の病院が良いわよ」と教えられたのです。

次賀さんの奥さんにとっては初めて聞く「折尾」という地名。それを3日間で2度も聞いて、これは、「折尾に行け」という神様のメッセージではないかと感じ、その病院を受診することにしたのです。

たまたまと言えばたまたまかもしれません。しかし、次賀さん夫婦は起きてくる出来事の中に、神様のメッセージがあるはずだと、このような些細な事の中にも、それを受け取る稽古をしていたと話します。

そこから不妊治療が始まりました。奥さんは

ホルモンバランスの乱れで、精神的に不安定になることもありました。次賀さんは、夫として何もしてやれないもどかしさを祈りに変え、夫婦で支え合い、前向きに取り組みました。そして…。

一回はだめだったんですね。8月に行って、9月はだめで、10月はちょっとひと月お休みして、で、11月に着床でした。

エコー写真でしか見てないんですけど、エコーの中で、こんな小さなただの塊でしたけど。これが見えた時はもう崩れ落ちました。

そして、令和5年6月、めでたく女の子を出産しました。

次賀さんはこう振り返ります。

子どもができることに関しては、お願いをして、自然妊娠というか、「タイミング療法で」が願いとしては理想でしたけど、結果それは、体外受精という手段にはなりませんでしたけど、その間に、そこに至るまでの願って願って願って、その稽古ができたこと。これが、お願いをして一発で、「はいできました」っていうところで、は決して得られなかった収穫だと思っています。

思い返せば、祈れる場所を教えてくださいました両親をはじめご先祖様、稽古の厳しさや楽しさを教えてくださいました役者の仕事、何事も受け止めて生かしていく、「土（どろ）の心」を教えてくださいました

金光教。つらく苦しかったことも今日の幸せのために全てが必要でした。

思い通りにいかない時は、塞ぎ込んでしまいがちですが、神様にすがりながら、「土（どろ）の心」になって、神様のメッセージを受け取っていく…。

「この経験で得たものはこれから繋がる」
そこには過去も未来も生かしていく、確かな
次賀さんの今日がありました。



《信心ライブ》

「今日はおかげ日」

(ナレ) おはようございます。今日は、大阪府金光教河内松原教会かわちまつげらの前田信忠まへだのぶたださんが、2023年6月、難波教会なんばでお話しされたものをお聞きいただきます。

前田さんは今年、79歳。週3回、人工透析を受けています。体調が万全でない中でも、自分に頂く役割は、神様が使ってくださいさる御用なのだ、進んで勤めておられます。

前田さんのお父さんは、太平洋戦争が始まる前、北九州の八幡製鉄所やはたに勤め、近くの金光教の教会にお参りしていました。当時の製鉄所は、とても活気がありました。経済的にも恵まれ、

結婚もし、幸せな生活を送っていました。

何もかもが順調だった中、お父さんが肺に膿がたまる病気で入院することになったのです。

それは、前田さんが誕生する前の出来事でした。もう助からない、と思った前田さんのお母さんは、教会に参拝したのです。

(前田) 母が看病をしておりましたら、体調が悪化し冷たくなっていく父を見ながら、夜中でありますけれども、教会へ飛んでいって、「ただいま、息を引き取りました」と親先生に伝えるつもりでお参りをした。すると、「今日は、教会の月次祭つきなみさい。おかげ日やで。おかげ頂きや」と言われたので、「今、息引き取りました」とは言えなかったのです。そのまま、病院へ帰っ

ていきました。病院に着いた瞬間に、「おおっ」と喉から詰まった物を吐き出すようにして、ゲップを出して、そのまま、おかげを受けてくれたんです。

んは、その後、金光教教師を志しました。迷いが起きた時、支えとなったのは、「どうしたらよいか分からない時でも、迷わず、飛び込んでみれば、神様にお守りいただける」という先生の言葉です。

前田さんは、お父さんが大病を患いながらも、奇跡的に命が助かったことを、両親から何度も聞いていました。もし、お父さんが助かってい

ある時、大切な祭典の当日に、前田さんは交通事故で足に大けがをしました。

なければ、自分は生まれていない。二人の命をつなげていただいた神様の働きに、前田さんは大きな思いを感じるようになりました。

河内松原の私の親が、私の左足をポンと触つて、「あつ、折れてるがな。もうすぐお祭りやで。しっかりおかげ頂きや」。その一言で、

大阪に戻った後も、家族で教会参拝を続け、信仰を大切にされました。そして、教会の先生の、「大きくなったら、御用させてもらいや」という言葉が、不思議と心に残っていた前田さ

「そやな、御用の中で起こったことは、御用の中でおかげを下さるんじや。母が、私の父が今亡くなりましたと伝えに行ったところが、『今日はおかげ日やで。おかげ頂きや』。この世界

を改めて、私に今、ここで見せてくだされたなあ」と。そう思った瞬間、「そうだ、このまましっかりおかげを頂こう」と。最初、頭の先までしびれるほどの痛みと苦しみがありましたけれども。ご神前に出た瞬間に、足の痛み、うずきがすぱっと無くなって、そのまま御用させていただきます、そのまま終わらせていただきました。

神様の御用を通しておかげを頂くという強い信念で、乗り越えられたのです。

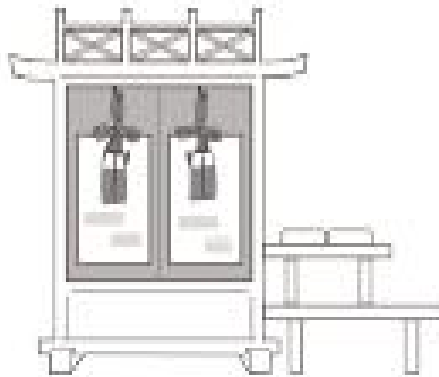
70歳の時には、ソフトボールの大会で、バスターボックスに立った時、心不全に見舞われました。懸命な救命措置を受けながらも、数日間、意識不明の状態が続きましたが、奇跡的に回復

して、現在まで、教会長としての役割を担っておられます。

親先生の命の中で、今日も、このように生かされております。70歳で、心肺停止40分間という、そういう非命ひめいというのか、容易ならぬ事柄が私の身の上に起こってまいりました。その40分間、ほんとは、意識は何日もございませんでしたから。命を頂いてありましても、目覚めなければ御用はできませんので。その無い働きが、改めて、命目覚めたんであります。その日から、本当に欲得ではなしに、今日、今、私に与えてくださってある、そのご神縁。その働きは、もったいなくも、神様がお使いくだされる御用やと思って、一心にそのところを大切にいただ

いておりましたら。させてもらうこと、本当に
できてくるのが、うれしくて、うれしくて。
なんぼでも、御用にお使いくださいと。今日、
申し上げておるような次第でございます。

いかがでしたか。父親の命が助からなければ、
生まれてこなかった自分。心不全で意識をなく
す中、目覚めさせてくださった神様の力。神様
が自分を守り導いてくださったっている。そのこと
を自覚できれば、どうにもならない事柄に出く
わしても、こんなにも力強く、心を元気にでき
るのですね。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 木曜日 あさ4時35分

放送センターHP

「こころで聴く
おはなし」



「こころで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。